

しるし

樋口一葉と龍泉寺界限

荒木
慶胤著

樋口一葉

八木書店



著者略歴 ^{あらい よしたね} 荒木 慶胤

大正六年栃木県二宮町に生まれる。
駒沢大学・北京清華大学に学び、現在、台東
区竜泉 3-6-4（茶屋町通り）で薬局を經營。
公職＝保護司の外、東京都衛生局嘱託。

樋口一葉と龍泉寺界限

定価 2,500 円

昭和 60 年 9 月 10 日 初版発行

著 者 荒 木 慶 胤
発行者 八 木 壮 一

発行所 株式会社 八 木 書 店

東京都千代田区神田小川町 3-8
電 話 03-291-2965
振 替 東京 4-10457

印刷所 株式会社精興社
製本所 橋 本 製 本 所

序説にかえて

野口 碩

一葉とその家族が下谷龍泉寺町三百六十八番地に移って来たのは、明治二十六年七月二十日であった。なぜ、一葉達がこんな場所を新居に選び定めたのであろうか、という疑問が時折話題になる。廓に近いことや細民街という環境の特殊性が好奇心を呼ぶのである。彼女の日記を見る限りでは、これについては特に動機があったわけでもなさそうである。次のように書かれている。

此度のおもひたちはもとより店つきの立派なるも願はず場処のすぐれたるをものぞまず料ひくゝして人目にたつまじきあたりをとのさだめなればつとめて小家がちにむさゝとせし処をのみ尋ね（「塵之中」明二六・七・

一五）

家賃が超低廉価で、なるべく知人の眼に付かない所に小店の開ける貸家を捜した結果、この二戸建ての長屋を捜して当てた、という事情である。しかし、背景には深刻なものがある。六月二十九日、家族決議をして、当初彼女達は商売を始めるために親戚知人から五十円を借りて仕度金を調達するつもりであった。山の手あたりの土地がらのよい所で、ひとかどの店を持ちたい願いからであった。六月三十日に早速遠州屋石川銀次郎宅に赴き、翌日十五円の返済金を取

立てている。その同じ日に芦沢芳太郎を呼び寄せ、山梨県東山梨郡後屋敷村の母方の叔父卯助宛に即座に手紙を出して五十円の借用をはかろうとしたが、返事は期待できない。そこで、七月四日、父則義の東京府庁時代の上司で日頃しばしば金銭的な世話にもなっていた小林好愛に家財を預けて五十円を借りようとしたが、翌日好愛から、調達不能という返信がとどいた。そこで同七日から九日にかけて、仲買商の田部井に衣料の売却を相談して、十日に十五円を受取っている。こうして得たあわせて三十円あまりも、相当分の生活費と則義の祥月命日の物入りで半ばは消えていた。十日、十二日、十三日、十四日と、質商伊勢屋に預けたものを請出して売却するなどして、引続いて田部井から調達をはかっている。結局、十五日から行動に移り、二十日に敷金家賃を支払って新居を定め、二十三日に問屋で仕入れの手付金一円を手渡した時には、依頼した仕入品に支払うべき五円は手許になかった。このような手狭な仕度で、店を出そうとしたのであるから、低家賃で「小家がちにむさ／＼とせし処」を捜し歩いた、というのも、うなづける言葉である。

知人の眼に付かないようにしたのは、特に萩の舎に来る人々を意識していた。同じ日の日記に次のような部分が見られる。

午後より更に山の手を尋ねばやといふ庭のほしければなり 駒込巢鴨小石川辺はいづれも土地がら静かによき処
なれど何がしくれがしの別荘など多く我が様なるいやしき商ひしたりとて買ふ人あるまじと覚ゆさては詮なし
牛込ならば神楽坂あたりこそと覚ゆれど知る人ちか／＼らむも侘しくかれこれさだまらずしてかへる。

駒込動坂の小笠原家、小石川関口の鳥尾家、前島家の人々、牛込新小川町の田中みの子等を意識した言葉である。「いやしき商ひ」という表現が、こうした上流の人々に対する恥の意識だけから出たものでないことは、日記をもう

少し読むと明かになる。家族の中でも、特に母たきは実業に就くことに反対であった。彼女は一葉に、「児賤業をいとなめば我死すともよし我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよ」とも言ったことがあった（「筆すさび」）。士族の意識であろう。一葉自身も、幼少期をふり返って、「只利欲にはしれる浮よの人あさましく厭はしくこれ故にかく狂へるかと思れば金銀はほとんど塵芥の様にぞ覚えし」と述べている（「塵之中」）。実業に就く決意をかためた時から、彼女の考え方は、生活中心の現実主義的なものになっていたが、一種の汚れの意識は、消えていない。龍泉寺町時代の日記には、「塵の中」という表題が付いている。「塵」は、「閑居」や「蓬生」と対立する言葉で、「世の塵」「市井の塵」を意味するが、上島金太郎氏が本田トミ女の談として、次のような記事を『樋口一葉とその周辺』に書いている。

トミさんは東京にあこがれて嫁にきたのだが、花嫁姿で大音寺前まできて車を降りた時は、右も左も塵箱がこわれたような家ばかりで、嫁にくる場所を間違って連れられてきたのではないかと思った。周囲の家々があまり汚いので逃げて行こうかと思っていたら、一カ月後に一葉さんが、薩摩絣の着物を着て通ったので、あんなきれいな人がこの龍泉寺町に住んでいるのなら、私もしんぼうしようよと、永住の決心が定まったと聞かされた。（「糸切り団子屋」）

上島氏は、腐れかかった杉皮葺きの屋根のならば町並みを、「塵溜の中に住人がいるとしか思えなかった」と説明しているが、確かに「塵の中」が、そうした環境の中で生活する感触を表現したものであることは、一面の事実と見られる。一葉は日記の表題を選ぶ場合、現実の場を素材にして象徴的に表現することが多いからである。龍泉寺町は、延享二年頃から茶屋の立ならぶ街として発達し、文久頃はその茶屋の数が二十軒以上に達していた。しかし、維新頃

には、その茶屋も姿を消し、遊廓と繋がりのある人々や極端に貧しい人々が生活する界限に変貌して行った。人口は、明治以後急激に増加しつづつあった。明治五年には二百軒に満たなかった家並みが、明治二十六年には四千戸を上まわり、大正期には五千七百軒に達していた。人口は、明治五年に六百三十五人であったのが、明治二十六年では約二千人、大正十二年九月の関東大震災直前では、一万五千人に膨張した。今日、都市の人口増加が、宅地造成や団地マンションの建設を促しているように、龍泉寺町の人口増加は、おびただしい数の長屋の出現をもたらしした。「たけくらべ」の冒頭に、

三島神社の角を曲りてより是れぞと見ゆる大^い厦もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長屋……

と描写されている。十軒長屋、二十軒長屋、三十軒長屋が道や路地を挟んで向い合った。中でも、「三木屋長屋」は、今日まで土地の人々によって語り伝えられている。上島金太郎氏によれば、三木屋の主人は、元來質屋を経営したが、質商を廃業して千軒もの長屋を建てたという。一葉の小説「われから」の下書の中に、この三木屋をモデルにして、西鶴の「日本永代蔵」風に主人公の生い立ちを描こうとした断片がある。これらの長屋で、貧しい人々が生活した。住民達の中には、酉の市の熊手造りを内職にするものが多かった。こうした町並みは、関東大震災によってほとんど焼失したが、罹災者達が多勢住むようになったため、昭和初期まで、龍泉寺町は一時スラムの状態になった。遊廓の茶屋街から細民達の街、スラム化という歴史をたどった龍泉寺町も、現在は環境が改善されて、新しい明るい町に変わっている。

因みに、一葉達が住んだ長屋は、家賃が月一円五十銭、隣は人力車夫の^{ばん}になっていた。上島氏によれば、家主は吉原京町の万年楼の主人で、万年楼は同じ三百六十八番地に一棟二戸建の長屋を数軒持っていて、どれも同じ家賃

を取っていたという。横山源之助の『日本の下層社会』によれば、貧民窟に住む一車夫が支払っていた家賃が一日四錢、月一円二十錢であるから、最も低廉な部類に入ると言えよう。

知人から消息を断った一葉達が、龍泉寺町に移ってまず交渉をもった人々は、伊勢利、広瀬伊三郎、西村釧之助、久保木長十郎、伊勢久の木村千代、そして北川藤兵衛であった。

転居の二日後、母たきが伊勢利を訪ね、商賈の相談に赴いている。この伊勢利は、明治二十二年七月則義死去の際納骨に赴いている。日記には「中橋の伊勢利」と出ているが、出例が少いため、どういう人物かを調べる手掛りが乏しい。しかし、「中橋」はどうやら日本橋中ノ橋ではなく、京橋区にあった中橋広小路を指すらしい。そこは、南横町十六番地の石井利兵衛の住所と一致するのである。石井利兵衛も則義死去の際三十五日忌に築地本願寺に墓参に見えている。石井は、則義時代に貸付があり、その返済を毎月送金していたらしく、樋口家に貸付の控と二十七年七月九日付の返済不足の詫状が残っている。伊勢利も石井利兵衛も日記に出て来るが、両者が同時に出ている記事はない。筆者は、和田芳恵氏から「伊勢利」は伊勢屋利兵衛の略称ではないか、という指摘をいただいたことがあるが、そうであるとすれば、石井利兵衛は「伊勢利」又は「伊勢屋」の屋号を持つ店舗をもっていたのではないか、と思う。二十六年十二月二十八日に、樋口家は伊勢利から五円五十錢を通運便で受取っている。これは、石井の返済金と同じものである。伊勢利は、たきに「門跡前」即ち浅草東本願寺前の高原町二番地の中村忠七を紹介した。ここは、荒物問屋と石鹼の製造を行っていた。樋口家は、この中村忠七から五円五十錢分の荒物を八月五日に仕入れている。飾り付けは伊勢利が手伝っている。伊勢利の店も荒物商ではなかったかと思われる。五円の品を仕入れるように教え

たのは、伊勢利に違いない。五円の品を飾り付けると何とか店の形がとこのうのである。

この仕入れの仕度金を、広瀬伊三郎から借りようとしたが、伊三郎の妻の急病のため、調達が遅れ、仕入れを延期しなければならなかった。伊三郎は、後屋敷村の卯助の前の養子入り先でこしらえた子供で、芦沢芳太郎とは腹違いの兄弟である。東京で商売を始めようと、二十六年七月妻を山梨に残して出京した。それより十年前、学生時代に樋口家に出入りしたことがあったようである。一葉達より一足先に浅草三間町二十番地の芳山保定という人物の家に落着くが、この時安西わかという女性と同棲している。二十八年一月に記された「しのぶぐさ」に「猪三郎は商店を開き信三郎は銀行を出したりといふ」という記事が見えるので、店を持ったのはかなり後のことであつたようである。

この伊三郎の商売は、金融業のようなものであつた、とも言われている。二十六年十二月七日、再び仕入れの資金ぐりに行詰まったのか、樋口家は「日なし」で高利の金五円を伊三郎から借りている。伊三郎との交渉は、二十七年五月転居とともに途絶えている。

出資の面で、伊三郎とともに樋口家が交渉をもつたのは、西村釧之助である。西村家は、一葉の母たきが本郷湯島の旗本稲葉正方の娘ここの乳母にあがつた時代から親戚のような関係にあり、釧之助の父信夫（旧名良之進）と母きく（旧名太田ふさ）の結婚の媒酌を則義夫妻がつとめたこともあり、則義が南町奉行配下八丁堀同心浅井竹蔵の株を買って士族になった時には、西村信夫が森良之進の名で妻の弟として親類書に載つた。西村信夫は、稲葉家の殿府移住によって以後帰農して常陸国東宮後村に住んでいたが、釧之助は上京して、泉太郎と同じ小永井小舟の経営する濠西精舎に通つた後、明治二十四年十月頃小石川表町六番地に礫川堂という紙類文房具の店を開いた。一葉達は、龍泉寺町へ移る前日道具を預けて釧之助から二十円を調達し、仕入れに当てようとしたが、開店に間に合わず、八月八日

にようやく近々に出来る見込みという返事を受取った。その後の記録はないが、おそらくそれから遠くない時期に、釧之助は約束を果たしたのであろう。しかし、一葉は釧之助の対応ぶりを憤って、「落ぶれてそでに涙のかゝるとき人の心の奥ぞしるゝ」の諺を引いて、感情を露にした日記を書いている。

七月二十五日に、たきが仲之町の引手茶屋伊勢久を訪ね、「おちよ」という女性に、仕立仕事の世話を頼んでいる。二十七年三月十九日の日記に「木村ちよ殿」と見える。木村千代を教えたのは、稲葉ではないかと考えられる。日記によれば、二十六年四月十五日に「稲葉君の奉職されたるにつきて入用なる衣類などの間に合ひがたきを西村君にかりたしとしてその取なし母君にたのまんとて」お鉢が訪ねて来たところ（「蓬生日記」）。稲葉寛がどのような公職に就いたかは、まだ明かでないが、この時から二十七年二月まで、稲葉は小石川柳町から移って下谷区金杉上町八十八番地の木村千代の家に間借りした。龍泉寺町時代の一葉の日記は、稲葉が自分の家からすぐ近い所に住んでいることををひた隠しにしている。彼女は、自分の零落を意識しながら、自分達が稲葉と同じ境遇に落ち込んでいることを考えたのであろうか。ともかく、木村千代を教えたのは、この稲葉に違いない。上野晴朗氏が和田芳恵氏に伝えたところによると、明治四十五年三月刊の『在京山梨人名録』に、神田区猿樂町二十一番地に住む下宿業・天野ちよの名が載っていると言う。木村千代は、七月二十九日に「五十二殿」という人物と一緒に、羽織の仕立の依頼に見えている。「五十二殿」は、晩年の一葉の住所控によれば、日本橋区本銀町二丁目六番地に住んだ天野五十次であり、「天野ちよ」は、木村千代が天野と結婚して改姓した名に違いない。木村千代は、稲葉が間借りした当時から、伊勢久で働いたわら、下宿業を営んだのかも知れない。

垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろひに紺足袋はきて、雪駄ちやら／＼忙がしげに横抱

きの小包はとはでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠や此処からあげます、誂へ物の仕事やさんと此あたりには言ふぞかし（「たけくらべ」）（一）

一葉は、この描写の中にそれとなく、伊勢久に足を運んだ母や自分の姿をしのばせている。

一葉の店は、当初荒物雜貨商として開業した。それは、ほぼ偶然に伊勢利から紹介されたものかも知れない。開店前から妹の邦子は心配であった。七月三十一日の日記に、「邦子職業の事につきて種々わづらひ多し吉田野々宮のふたりに計りて又せんすも有べしとて此夜二人池之はたの吉田君がり訪ふ」とある。邦子は、おそらく荒物だけでは客が付かないことを心配したのであろう。事実、長屋の住民達は世帯道具さえも満足に持っていなかった。物を買える住民達は、皆自分の町では買わずに、ほかの町、特に大門前の今戸、田中辺りに出かけて行って買った。「たけくらべ」は、この町を「商ひはかつふつ利かぬ所」と述べている。一葉と邦子は、池之端の吉田宅で相談した結果、神田区雉子町三十番地の北川秀子の家を訪ねてみることにした。吉田某も野々宮きくも北川秀子も、邦子が木村伝習所で知り合った友人達であった。野々宮きくは、盛岡女学校に赴任していたが、縁談のため帰京したばかりであった。八月四日、北川宅を訪ね、菓子小売の手続を教えられて、八日に浅草区南元町の東京府庁厩橋分署に認可を取り、十一日に初めて北川秀子の父藤兵衛の周旋で神田の多町に買出しに出ている。

神田多町の市場は、明治十年六月以来、多町二丁目、連雀町、須田町、佐柄木町、通新町を合併して、神田市場五ヶ町と称し、菓物青物問屋二百四十戸、乾物店三十七戸、荒物玩具問屋二十三戸、荷車問屋四十七戸、飯食店十二戸によって組織されていた。通称「多町の青物市」と呼んだ。一葉は、五時前に家を出て、ここで菓子類や玩具荒物を買出した。男達にまじっての競買いは、商売のきびしさを最も覚える瞬間であった。初めての買出しの記録の中で、

彼女は「まだ生れ出てよりかゝる処の景況を知らざる身にはそぞろ恐ろしきまでものはげし」と書いている。帰って来るともう午前十時をまわっていることがしばしばあった。仕入れに出るのは、主に一葉の役目で、店番は邦子がした。買いに来るのは、大半が二厘三厘とか五厘六厘という買物をする客であった。彼女は、その生活を、「小家がちのむさ／＼しき町にかたる乞食など様の人を友として厘をあらそひ毛を論じてはてもなき日を過すらんよ」と書いている（『塵中日記』明治二六・一一・一五）。彼女の付けた『仕入帳』を見ると、どのような品がよく売っていたかわかる。殆どの買物が菓子・玩具類、そして、糸、蠟燭、しゃぼん、浅草紙、蚊遣香、線香など手近な日用品に限られていた。

一葉は、龍泉寺町の生活に入るために、萩の舎、文壇、則義以来の親戚めいた知人関係、半井桃水との心理的絆を一時捨てて断とうとした。そして、同じ市井の塵にまじわって生きる広瀬伊三郎、西村釧之助、伊勢利のような人々との、必要な関係だけを捨てなかった、と言うことができる。「塵の中」は一葉にとって、本質は逃避であった。七月二十六日の日記に、

いづれぞやうきにえたへで入そむる

み山のおくと塵の中とは

という一首を書き入れている。その逃避が積極的な意思の発現に向かって行動に転じたのは、二十七年二月二十三日久佐賀義孝を訪問した頃である。しかし、その逃避自体にも、積極的な一面があった。すなわち「塵の中」で、彼女は、そこに生活する人々とかかわることによって、成長した。

龍泉寺町の人々と一葉のかかわりを日記に見ようとすると、則義時代以来の縁戚や菊坂時代の間人間関係——特に半井桃水、中島歌子等とのかかわりの心理的葛藤や、『文学界』同人等とのつながりだけが表面に出て、街の住民達との触れ合いは、主として商売生活の記録の一端にしか現れて来ない。「五厘六厘の客」に彼女は何かを感じ取っていたのであろうか。「かたる、乞食など様の人」は、確かに『文学界』の同人達や萩の舎に入出入りする人々とあまりにも掛離れた環境の惨めさを意識しての自嘲から出た言葉に違いないが、その貧しい人々に、実際に彼女はどんな素顔を見たのであろうか。

当時、十一月十五日の日記に、一葉は次のように書いている。

いにしへ人のいはゆる苦は樂の種ならずして苦中の奥が則樂也

あらゆるうきよをつまはじきせしも偽りあらゆるうきよに爪はじきせられしも偽りおもへば此恋の誠をしらざりし也うきよ行く処として善人なからむはた又悪人なからむ万人が万人に對しての処為はしらず我が見るめひとつにては何方いかなる処にも至美至善なる人はあるべし（『塵中日記』）

彼女が「苦中の奥が則樂也」と言っているのは、「塵の中」で彼女が本当の生活の苦樂を味わい、既存の偏見を捨てて真の人間性を見る眼がそなわって来たところで生まれた感慨と言うべきであらう。

一葉は、明治二十六年二月頃、『都の花』の藤本真の依頼で、一つの作品の執筆に腐心した。狙いは、「完全無瑕の一美人」、つまり最も美しい理想的な人間を書くことであったが、構想が出来上がらないまま、『都の花』が廃刊になって挫折した。当時、萩の舎に失望して居た彼女は、人の知らない場所で世塵とかかわらない生活をする人間に理想を求めようとしたにしている。龍泉寺町で書かれた第一作「琴の音」は、この時の構想が一部分活用されたと見られ

る作品であるが、龍泉寺町の近傍にある、江戸時代から閑雅な場所として風流人に愛され、多くの文人が集まった根岸が森江しづの住まいになっていて、その女性の奏でる美しい、「塵のうきよの紛^{みだれ}雜」を知らない琴の音と家庭の崩壊の犠牲になって悲惨な運命のもとに育った渡辺金吾との触れ合いが、少年を救いに導くようになっていく。この琴の音を仲立てにした閑居する女性と世塵に汚れた金吾との出会いが、一葉の考えた自分の文学と龍泉寺町の住民達とのかかわり方にきわめて近いものを感じさせる。龍泉寺町の生活の中で書かれたと思われる本間久雄氏旧蔵の断簡には、「我れは人の世に痛苦と失望とをなぐさめんために生まれ来つる詩のかみの子なり　をこれるものをおさへなやめるものをすくふべきは我かつとめなり」「このよほろびざる限りわが詩は人のいのちとなりぬべきなり」とある。一葉は、「塵の中」にあっても、心理的にはしばしばアウト・サイダーになった。たとえば、二十六年十月九日の日記に、

店は昨日一昨日の頃より売高いと多く成て国子のいそがしき事起居ひまなし、……我は何事も打まかせてさるべき処々へかひ出しといふ事に行く外は勘定も工夫もしらず唯二間なる家の奥にこもりて書をよみ文をつくる店は二厘三厘の客むらがり寄てこゝへもかしこへもと呼はる声蟬の鳴たつにもたとへつべし障子一重なる我部屋は和漢の聖賢文墨の士来りあつまつて仙境をなす塵中に清風を生じ清風おのづから塵中に通ずわが浮草之舍も又一奇ぞかし

この記事は、『文学界』の平田秃木が訪問した日より二週間も前に書かれている。塵中で世塵の汚れを知らない世界が意識され、その世界が文学によって生じ、文学を通じて浸透し、環境を浄化して行くという観念が働いている。この場合、自分の存在を「浮草」と表現しているのは、流れに浮ぶ浮草を意味するのであって、「一葉」という筆名になった舟とはほぼ同じ内容の思想である。この頃、「流水園雜記」という表題をもつ随筆ノートも設けている。「つゆ

しづく」には、

よの中も何かいとはん水の月の

とまらぬかけをこゝろにはして

という歌などが見える。うつりゆく環境に処する途として、自分の執着を捨て、愛憎好悪の感情に拘泥せず、行水に浮ぶ存在に成り切ることを意識したものである。「塵中百首」や日記の中には、「いさゝ川」という表現を用いて、自分の細い生活の存在感を詠んだ歌もある。これらには、すべて或る意味のアウト・サイダーを意識した一葉が認められる。上島氏によれば、遠藤とめ女の語るところとして、「夏は薩摩緋、冬は唐棧の着物と羽織をキチンと着ていたが、近所の人達からは大変な変り者の女と目されていた」という談話を伝えている。

龍泉寺町の生活の最後の頃、彼女は日記に、「おもへば聖者は行みづのながれのとゞこほる所なからんぞうら山しき」と詞書きして

魚だにもすまぬかき根のいさゝ川

くむにもたらぬところ成けり

と記している。しかし、アウト・サイダーに終始して、彼女が環境に全く関心を示さなかったか、というところではない。既に引用した断簡から理解できるように、彼女は自分の文学が貧民や虐げられた者達の失望と悩みの救いとなることを理想に描いていたし、「琴の音」「暗夜」「大つごもり」がそのモチーフを展開させていることも事実である。「大つごもり」のお峯の実家八百安は、小石川初音町に舞台を設けているが、実は龍泉寺町にあった八百初をモデルにしていると思われる。「大つごもり」の構想のうち八百安の部分は、「雪の日」と題して龍泉寺町で試作しており、

「段々に食ひへらして天秤まで売る仕義になれば、表店の活計たち難く、月五十銭のうら屋に人目の恥を厭ふべき身ならず、又時節があらばとて引越しも無惨や」とある部分も、事実かなり近い。文学を貧しい人々の救済の手段にという功利的な考え方は、文学の社会的役割を過大視した現実性のないものであったかも知れないが、一葉が環境問題とかかわる一つの女性としてできる可能な方法を模索した末得た暫時の結論なのである。無論政治や行動にも関心が強かった。二十六年十月二十五日の日記には、大音寺前の四辻の交番所に詰めていた下谷警察署の田辺巡査と貧民救助の談しを交わしたという記録も見える。

救済を考える場合、心理として自分が解放された場所に居るという意識が働くものであるが、一葉は、「塵中」の外に自分を置く意識は持てても、高い場所から住民達を見ていることはできなかった。

人になさなければ黄金なくして世にふるたづきなしめる家は追はれなんとす食とぼしければこゝろつかれて筆はもてども夢に在る日のみなりかくていかさまにならんとすらん死せるかばねは大のゑじきに成りてあらぬ名をば野外にさらしつ（「いはでもの記」）

二十七年頃には、彼女自身もいつ路頭に伏すか分らない窮状に追い込まれていた。彼女が「大音寺前に一文ぐわしならべて乞食を相手に朝夕を暮しつる身」と書く時、彼女はその貧しい客達と自分をほぼ同じ立場に置こうとしているのである（「水のうへ日記」明治二八・一〇）。同じ水準に立つことによって、一葉は子供達や住民達の世界に入り、その人間性を深く理解することができた。「たけくらべ」の未定稿の中で、一葉は、長吉等の乱暴を受けた美登利の心理を次のように描写している。

エゝ年のゆかぬが無念な、姉さんに孝行を先へ取られた、我れとても心は誰におとるべき、樓の旦那も美とりの

方がさかしいと褒めてくれた事もある物を、店へ出なば二枚とは下らじ、お職の小式部さんがどんすの打かけに三がいまつの縫ひをこれ見よがしにひけらかすとか、我れならば夫れほどのものはつみ夜具にしたてゝ楼内に総しきせ、つき出しの二日目には朋輩の総仕舞をつけて、其時こそは美登利が孝行の時、父さんには甘き物そへて酒のませ、母さんのほめ詞きゝたや、あゝ年が取たい、孝行がしたいと夢のまもわすれぬはこれ、さるからに女郎め、乞食めと、のゝしられし奇怪さ、おゝ私は女郎の妹に違ひない、勤めするが何ぜいやしうて乞食といふた、人中の泥草履に面を汚して、遊び場処を踏こわされ、……

一葉は、最初このような描写を試みることによって、界限の最も衝撃的な考え方を美登利の心理に取入れようとした。龍泉寺町の住民達、特に「廓者」と呼ばれた人達の間では、子供は月経を見るようになったら、廓に勤めるのが親に對する一番の孝行と言われた。一葉は、貧困がもたらしたこの常識に、少からぬ衝撃を覺えたらしく、『文学界』の同人にもこの談しを語ったという。彼女が万年楼の長屋を追われるような氣配になった背景にも、こうした吉原と密着した近隣の人々の常識と反りの合わない所に生じた困難な問題が感じられる。「たけくらべ」の定稿の筆を下す時、一葉はこの部分を学校を嫌がって内攻的な表情を見せる美登利に書き変え、その人間性を効果的に描き出す工夫を加えた。廓に入ることが決まった日、美登利は、

すべて昨日の美登利の身に覺えなかりし思ひをまうけて物の恥かしさ言ふばかりなく、成事ならば薄暗き部屋のうちに誰れとて言葉をかけもせず我が顔ながむる者なしに一人氣まゝの朝夕を経たや、さらば此様の憂き事ありとも人目つゝまじからずは斯く迄物は思ふまじ、何時までも何時までも人形と紙雛さまをあひ手にして飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑゝ厭やゝゝ、大人に成るは厭やな事、何故このやうに年をば取る、